

エヴェンキ

トナカイ飼育の崩壊と 狩猟への転換

たかくら ひろき
高倉 浩樹

東北大学東北アジア研究センター准教授

はじめに

ソ連崩壊後に人類学者によって報告されたのは、シベリア先住民文化の代名詞ともいえるトナカイ飼育業が衰退したという事実だった。西シベリアのネネツ人の例外的事例があるとはいえ、全ロシアの家畜トナカイ総数は一九九〇年の二三〇万頭から二〇〇六年の約一六六万頭へと大幅に減少した。このことは、社会主義体制の崩壊によって国営農場による農業畜産生産体制が維持できなくなったというロシア全体に共通する現象でもある。と同時に、先住民の固有の現象としての側面ももっている。シベリア先住民社会はロシア国家の農村部、しかもいわゆる辺境地に存在し、既存の交通輸送網から外れていることが多い。社会主義時代は採算を度外視したヘリコプターによる輸送網が機能していたが、市場経済化によってそれが断ち切られると、住民たちは計画経済だけでなく、新しい市場経済とも十分つながることなく、生存経済に依存する度合いを高めるようになったからである。

ここで紹介するサハ共和国(旧ヤクート自治共和国)北西部、言い換えれば中央シベリア高原東北部の北極圏に位置するオレニョク郡ジリンド村の状況も、シベリア先住民社会の一般的な文脈で理解できる部分が多い。郡内の雇用を支えていた重要な生産部門であるトナカイ飼育が悪化し、その頭数規模はソ連末期と比べて六分の一まで縮小したからである。この地域の住民の多くは野生トナカイ狩猟や漁

撈などに依存するようになった。しかし調査をおこなうなかでわかったのは、ソ連崩壊前後から、野生トナカイの群れの移動ルートがこの地域を通るようになったという事実であり、それと計画経済から市場経済への体制移行がセツトになっていたということである。さらに、近年、オレニョク郡がエヴェンキ民族地区として承認されたという事実が判明した。また、この地域では古くから稀少金属発掘がおこなわれてきたという事実もある。

環境変動、体制移行、開発、民族意識の台頭という四つの現象が相互に関係しているこの地域の事情には、単にポスト社会主義下の先住民社会という以上の地域的な文脈が存在している。本稿の目的は、それを詳らかにしながら、シベリア北極圏先住民社会にみられるひとつの特性を明らかにすることである。

オレニョク概観

調査地のオレニョク郡はサハ共和国北西部に位置する。郡のほとんどが北極圏に含まれ、レナ川下流西方にあり、オレニョク川とアナバル川が貫いている。西にはクラスノヤルスク地方が接し、南はダイヤモンド開発地区であるミールヌイ郡と接する。郡名はオレニョク川に由来する。森林ツンドラの美しい景観が広がっている。森林ツンドラというのはツンドラとタイガ(針葉樹林帯)の中間的な形態で、木のないツンドラの大地からところどころにまばらな

林が顔を出しているという状態である。ツンドラとタイガはシベリアの生態を示す言葉だが、ツンドラは「凍原」とも訳されるように、通常は大地が凍結し目立った樹木がない地帯で、北米大陸やグリーンランドも含めて北極海沿岸に分布している。これに対してタイガは北方林とか亜寒帯林とよばれ、ユーラシア大陸北部・北米大陸北部と広範に分布し、地球の全森林面積の三分の一以上におよぶ。熱帯



ハリヤラフ村で開催されたオレニョク・エヴェンキ民族地区設立一周年記念式典で、民族衣装を着て踊る子どもたち。2006年

雨林と比べると森林を構成する樹木種は多くなく、カラマツやトウヒなどがモノトーンとなって広がるのが特徴である。私自身は、これまででもっぱらタイガや山岳地帯の調査をしてきたこともあり、二〇〇六年に訪ねたときに、人びとの日常会話で「ツンドラでは」「ツンドラにいく」という表現が大変興味深かった。

オレニョク郡内には、稀少金属や天然ガスをはじめ、油頁岩、石灰岩、キンバライト、ニオブなど、さまざまな資源が埋蔵されている。なかでもダイヤモンド原石がその一部に含まれるキンバライトについては、オレニョク郡やその北部のアナバル郡、さらに南部のミールヌイ郡にまたがって分布している。ミールヌイはサハ共和国、そしてロシア連邦全体のダイヤモンド生産地の一大拠点であるが、オレニョク郡はその隣接領域に位置している。

その面積は巨大である。そもそもサハ共和国自体がほぼインドに等しい面積で、広大なロシアの一八パーセントを占めているが、オレニョク郡はそのなかで最大の面積を誇る。三一万八〇〇〇平方キロメートルとほぼフィンランドに等しい広さを持ちながら、人口はわずか四四〇〇人で、人口密度は一平方キロメートルあたり〇・〇一でしかない。人口の五四・三パーセントがエヴェンキ人、三二・三パーセントはサハ人(旧称ヤクート人)で、ロシア人は九・一パーセント、残りはエヴェンキ人その他となっている。この郡内に集落は四つしかなく、もっとも北方に位置するジリンド村、郡中心地のオレニョク村とこれに隣接するハリヤラフ村、この三つはエヴェンキ人が圧倒的に多い。郡南東部に位置するエイイク村はサハ人の村である。

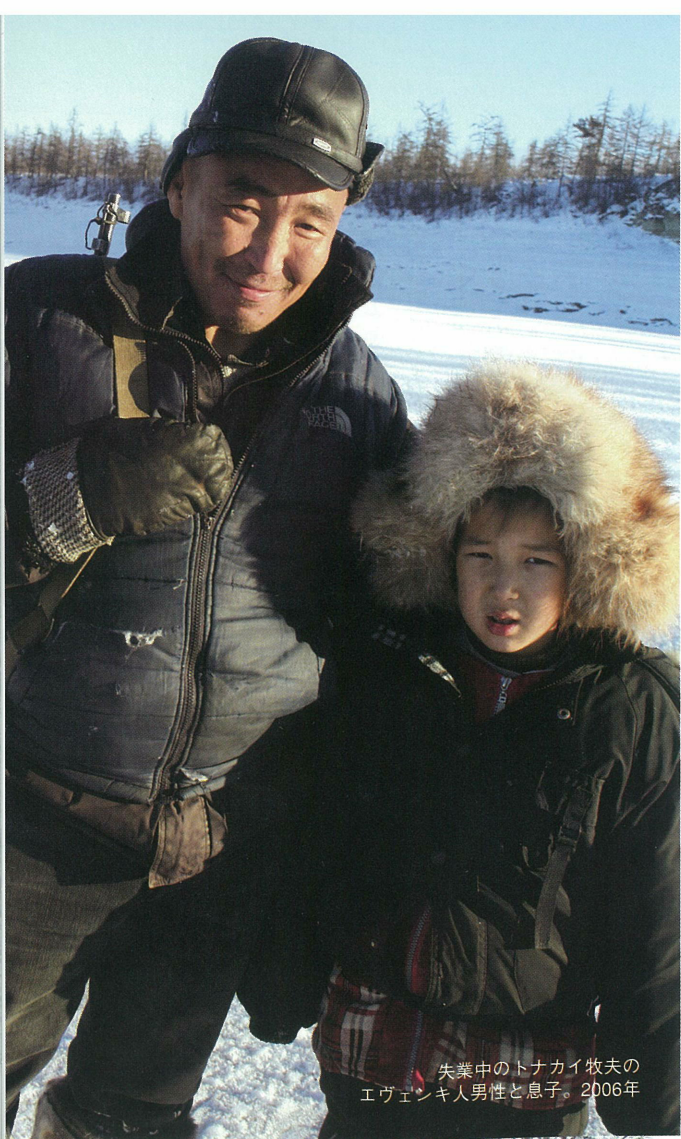
興味深いのは、二〇〇五年にこのオレニョク郡がエヴェンキ民族地区となったことである。二〇〇二年の全ロシア国勢調査によって民族人口が公式に確定され、その後、民族地区としての申請をサハ共和国政府におこない、議会での審議を経て〇五年一〇月に承認された。郡の人口の過半数がエヴェンキ人なのだからこの決定は当然のことのよう

にも思えるし、またソ連崩壊後の民族政策の傾向とも一致している。というのは、ソ連崩壊前後から日本という市町村レベルでの民族行政区が認められるようになったからである。ちなみにソ連時代初期には地方行政の末端レベルでの民族特別行政区が数多く設けられたが、一九五〇年代以降、行政と農業生産の効率化を背景に廃止されたり統合されたりした(Pika 1999)。

しかしシベリアの多くでみられるように、民族地区としての申請と承認にいたる過程は単純なものではなかった。この郡内には主としてエヴェンキ人、サハ人、ロシア人が暮らしていると述べたが、言語コミュニティという視点で見ると住民の大半はサハ語(テュルク諸語のひとつ)とロシア語のバイリンガルである。この地域でエヴェンキ語



トナカイ放牧のキャンプ。オレニョク郡。2006年



失業中のトナカイ牧夫の
エヴェンキ人男性と息子。2006年



放牧キャンプのテントは、
トナカイの皮が張られて
いる。女性たちがまと
っているのは、トナカイ
の毛皮のコート。2006年

繡^{しゅう}などに使われる文様に残ったといわれている (Gurvich 1977)。

この地域を二〇世紀前半に調査したロシア人やサハ人の民族学者たちは、レナ川下流、とくにその西部からアナバル川、ハタンガ川にいたる北極圏に分布するサハ語コミュニティを「北方サハ人」とよび、レナ川中流域を中心とする「中央サハ人」との文化的差異を強調した。そうした差異は、研究者たちが確認する以前に現地住民のあいだでも認識されていたようである。

一九三二年八月二〇日に刊行された新聞「社会主義ヤクーチア」紙に掲載された署名記事では「オレニョク地区住民は前世紀(一九世紀)の三〇年代からヤクート人である」と記され、レナ川中流域から移動したサハ人がツングース諸語を話す人びとの文化を受け入れたのであって、その逆ではないことが強調されている。さらに、住民のうち定住しているのは八割にすぎず、残りはトナカイ遊牧

をしているが、それにもかかわらずサハ民族文化を維持していると記されている (Boyakova 2003)。この記事で「エヴェンキ化したサハ人」「サハ化したエヴェンキ人」のいずれが妥当な判断なのかはともかくとして、レナ川中流域とは異なる生業文化をもつサハ人という認識があったことが確認できる。

こうして文化的差異がみいだされた北方サハ人と中央サハ人の関係は、二〇世紀のソ連の近代化政策を通して統合されたというのが通説だった。オレニョクの北方サハ人の調査をおこなったロシア民族学者グルヴィッチは、社会主義化によって一九六〇年以降、トナカイ遊牧民としてのサハ人は消滅し、ネイションとしてのサハ人概念が成立したと主張している (Gurvich 1963)。

オレニョク郡の動向をそのように理解していた私にとって、二〇〇五年にここがエヴェンキ民族地区となったという知らせは驚きだった。残念ながら今回の調査は予備的な

ものだったので、どのような経緯でエヴェンキ民族地区という選択が住民によってなされたのか明確に理解できたわけではない。ただ、この地域では自分たちが何者であるのか、サハ人なのかエヴェンキ人なのか、長いこと議論がされてきたという。結果として彼らを選んだのは、エヴェンキ人という民族アイデンティティだった。興味深いのは、民族アイデンティティが個人レベルというだけでなく、地域全体の選択の対象になるということである。歴史を振り返れば、複雑な民族移動があり、言語・生業・民具といった分野で混交した状態が形成されてきた。にもかかわらず、あるいはそれゆえなのか、住民はあえて混交したアイデンティティではなく、明確に区分された民族アイデンティティを希求したのである。これを実現させたのは、サハ人の歴史学者の答申であった。

この事例が興味深いのは、住民の民族帰属意識と学者、行政が三位一体となっているからである。つまり、学者の



ジリンダ村のフォークアンサンブルのメンバー。美しい刺繍の民族衣装をまとっている。2006年

(ツングース諸語のひとつ)を日常語として用いる住民はほほえない。ロシア語が浸透したのはソ連時代になってからだが、サハ語はすでに一九世紀初頭からこの地の住民の共通語であったのだ。サハ語が共通語となった経緯には、この地域の二七―一九世紀にいたる民族形成史が深くかわっている。その歴史を振り返りながら、この民族地区誕生の背景を明らかにしよう。

地域民族史とエスニシティ

ロシア人コサックたちが残した記録によると、一七世紀にオレニョク川流域に暮らしていたのは、エヴェンキ人の複数の氏族であった。一七世紀には、南の中央ヤクーチア(現在のヤクーツク市がある地域)からはるばるサハ人の一部が民族移動してきたことも記録から確認できる。民族移動は一回限りではなく一七―一八世紀を通して漸次、数十人といった小規模の集団によっておこなわれた。サハ人だけでなく、エヴェンキ人もまた、現在の共和国内のさまざまな地域から移動してきた。さらに隣接するクラスノヤルスク地方エヴェンキ自治管区や同地方タイミール自治管区からの移動もあった。移動の原因をみきわめることは難しいが、この地域には帝政ロシアの支配が十分およばなかったことや、野生トナカイ群が時折移動してくることがおもな理由であったと考えられている。そうしたなかでの民族間・民族間での紛争や対立、さらに天然痘など疫病の蔓延により人口構造も変動していったが、結果としてエヴェンキ語コミュニティは縮小し、彼らを吸収するかたちでサハ語コミュニティが形成されていったようだ。その一方でこのサハ語コミュニティは、南部の中央ヤクーチアの環境に適応していた生業文化を維持できなかった。結局、牛馬飼育は放棄され、エヴェンキ人のトナカイ飼育や野生トナカイ狩猟などがおこなわれるようになった。レナ川中流域のサハ人文化は、婚姻儀礼や葬礼、さらに民具や刺



食料品や雑貨などが並ぶジリンダ村の個人商店。2006年



零下20度の凍結河川上は、溶けることがないため、自転車でも思ったほどは滑らない。2006年

研究によって明確化された民族概念を基盤にこれを行政が承認し、住民に「民族」を選ばせる。この過程が浸透するなかで住民自らが、研究者と行政が規定する「民族」を名乗るようになるという経緯である。佐々木はかつてそうした現象をソ連民族政策の帰結として紹介したが（佐々木、二〇〇三）、同じことはポスト社会主義のロシアでも継続しているようである。さらに関心を引いたのは、研究者自身の民族帰属意識である。この歴史学者は、オレニョクの住民にみられるサハからの言語・文化的影響は二世紀をこえる歴史的なものであるが、トナカイとともに生きる人びとはやはりエヴェンキ人であるという信念をもっていた。それに基づいて、ロシア人のグルヴィッチが誤って北方サハ人という概念を使っていると批判する。そこには、一七世紀の移民の歴史のなかで複数の民族集団が混在し形成されたこの地域独特の文化の存在は認めつつも、民族的帰属については曖昧なものは認めないというソ連民族政策と同様の態度がみられるのであった。

牧畜と狩猟、そしてダイヤモンド

エヴェンキ人というアイデンティティとトナカイ飼育を切り離すことはできない。サハ共和国では、トナカイ飼育は、元来牛馬飼育を伝統とするサハ人の生業ではなく、エヴェンキ人やチュクチ人など「北方少数民族」のものであるという方針のもと、さまざまな補助政策が実施されてきた。それによってトナカイ飼育は牧畜産業に転換されたが、にもかかわらずオレニョク郡では社会主義崩壊前後からトナカイ牧畜が縮小し、野生トナカイ狩猟の重要性が高まってきた。

オレニョク郡の家畜トナカイ頭数は、ソ連末期の一九九一年時点で二万二〇〇〇頭で、サハ共和国のトナカイ総数の五・五パーセントを占めていた。それが二〇〇五年には三八二六頭と六分の一に頭数が減り、共和国でのシェアも

二分の一の二・六パーセントへと落ちこんだ（サハ共和国統計年鑑二〇〇五）。こうした頭数の減少はロシア全体の動向とも一致する。ただしシェアが落ちこんだ理由は別にある。郡のソフホース（国营農場）はオレニョク支部とジリンド支部の二つから構成され、ソ連末期にはほぼ一万頭ずつ飼育していたが、ソ連崩壊後、このうちのジリンド村ではトナカイ飼育がほぼ壊滅したのである。

ジリンド村でトナカイ飼育が急速に衰退したのは体制変化だけが理由ではない。一九九〇年前後から野生トナカイ群の移動ルートとジリンド支部のトナカイ放牧地が重なり、野生トナカイの大群に家畜トナカイが吸いこまれ、家畜頭数が激減したという。それと反比例するように、当然、村の住民は野生トナカイ狩猟を生活の糧とするようになった。野生の群れは、レナ川とオレニョク川の下流域から南西に五〇キロメートルほど移動するという。年に二回、一〇〜十一月の南下と四〜五月の北上の際が狩猟の絶好の機会である。川が完全に凍結しているときとあつという間に通過していくが、凍結しきつていない川の河川敷でもたまたましている群れと遭遇する時がある。これが好機である。この時期になると、漁をおこなう人びとも屋外に出るときには猟銃と双眼鏡をもって出かけ、群れを確認するとすぐに狩猟に従事できる態勢をとっている。ジリンド村の住民世帯レベルで、銃器類やスノーモービル、モーターボートの所有状況を調べたが、その所有割合は非常に高い。少なくとも銃器類の保有率はサハ共和国内でもっとも高いという。

野生トナカイの狩猟は一年を通しておこなわれるが、一〇〜十一月ごろの村の付近に群れが移動してくる際には一世帯あたり一〇頭ほどが捕獲される。それ以外にはツンドラまで出かけて狩猟をおこなっている。平均するとひとつの世帯で一月一頭ほどは確保しているという。捕獲したトナカイは枝肉に解体され、自宅屋敷内の永久凍土を掘ってつくった地下貯蔵庫に保存しておく。漁撈も九〜十二月を中心に多種多様な魚がとれ、筆者が調査していた時期には、

ら一〇〇キロメートルほど北にあるアナバル郡のエベリャフ村の開発区で季節労働の仕事があることを知って働きはじめ、現在に至っている。夏の四カ月のみの雇用だが、月収は二万五〇〇〇ルーブル（約一二万円強）である。村の平均月収は四〇〇〇ルーブル（約一万六〇〇〇円）ほどので、その高額ぶりがわかるであろう。九月にジリンド村に戻ってくると、野生トナカイ狩猟や漁撈をおこなっているという。彼は、サイガという高価なライフルを保有しているほか、スノーモービルを一台、モーターボートは二機もっている。この動産は、彼が出稼ぎをしているがゆえなのである。

ダイヤモンド開発で家畜飼育がだめになり、にもかかわらず今度はそのダイヤモンド開発者に対し野生肉を販売し、一方、出稼ぎも可能となった——そうした事態からは村人に複雑な感情がうまれそうである。とはいえ、興味深かったのは、トナカイ飼育が消滅したことに対して、何人かの村人がみせたさばしさばした態度だった。人びとは、家畜トナカイを失ったことで絶望するというより、むしろ野生トナカイが来たことを受け入れ、これを淡々と利用していた。それは単なるあきらめとも違い、家畜トナカイと野生トナカイが入れ替わることを当然視するような姿勢だった。スツップや砂漠の牧畜と比べると、シベリアのトナカイ飼育は狩猟との境界が明瞭とはいえないと人類学理論は指摘している。そのことをなぞるような体験だった。

おわりに

こうしてみるとトナカイ牧畜から野生トナカイ狩猟への転換というのは、単なる生存経済への移行ではなく、この地域の資源開発の歴史と、社会主義体制の崩壊という、現代の文脈のなかに存在していることがわかる。興味深いのは、この野生トナカイを可能にしたのが、社会主義の崩壊という体制の変化よりも、群れの移動ルートの変更とい

凍結した河川の上での網漁がおこなわれていた。

野生トナカイの群れがジリンド村にくるようになったのは、ダイヤモンド開発が原因と多くの住民は考えている。九〇年代にダイヤモンド採掘が実施されたことによって、野生トナカイ群の移動ルートが変わってしまった。そのために家畜トナカイが連れ去られる被害が起きたが、一方、野生トナカイの肉を十分確保できるようになったというのである。

つまり、ダイヤモンド採掘のせいでトナカイ飼育ができなくなったということになる。しかし、家畜トナカイ放牧地とダイヤモンド開発の関係は、近年にはじまったわけではなく、ソ連時代から存在したようである。興味深いのは、ジリンド村に住む一九三九年生まれのパヴロワさんから聞いた話だった。彼女はかつて夫とともにツンドラの放牧地でトナカイ飼育をして働き、今は年金暮らしである。その彼女自身、一九五〇年代終わりから六七年まで、モスクワからきた地質学者のダイヤモンド探査ガイドとして働いていたというのである。家畜トナカイを移動手段に、ロシア人地質学者とともにツンドラをまわって旅を続けたという。実際、オレニョク地方史をひもとけば、一九五二年からレニングラードの北極地質学・科学調査研究所（NII GA）がオレニョク川での探査を始めている（Boyakova 2005）。そうしてみつかったダイヤモンド採掘所はオレニョク郡以外に、その北に位置するアナバル郡にも点在しており、現在これらは住民にとって臨時の雇用先であると同時に、野生トナカイ肉を小売りする相手先にもなっている。

役場でダイヤモンド開発区への出稼ぎ労働数について訊くと、二〇〇六年はジリンド村からは二三人だった。村で恒常的に職に就いている人は一二〇人ほどだから、この人数はなかなか大きい。さらにいえば給料が圧倒的に高いのである。ジリンド村の二六歳のルキノフ氏は、一九九九年に学校卒業後、村の発電所で雇用され、その後独学でダイヤモンド技師となった。数年前の休暇の際にジリンド村か

う環境変動に依拠し、さらにこのことと資源開発が密接にかかわっていることである。その関係性を因果関係でつなげるかどうかまでは、筆者の調査は進んでいない。とはいえ、人口八〇〇人ほどの小さな先住民コミュニティの生業転換が、複雑な歴史と社会の文脈に位置していることを示すことができたであろう。さらにもしるいは、トナカイの飼育と狩猟こそが自分たちの生業であり文化であるとする考え方が、まさにソヴィエト民族学が構築したエヴェンキ人の伝統文化像と一致していることである。現在の生業パターンを続けるかぎり、彼らはエヴェンキとしての自覚をもちつづけることになる。

ポスト社会主義下、中央シベリア高原の北極圏に位置する人口わずかな先住民コミュニティは、環境変動、体制変換、開発、そして民族政策という四つの要因に翻弄されつつも、独自のライフスタイルとアイデンティティを維持しているのである。

参考文献

- 佐々木史郎、二〇〇三「ロシア極東地方の先住民のエスニシティと文化表象」瀬川昌久編『文化のデイスブレイ』風響社
サハ共和国統計年鑑、二〇〇五 Statisticheskii Ezhegodnik Respublika Sakha (Yakutia): Oficial'noe izdanie. Yakutsk: Sakhapolitgrafizdat.
Boyakova, S. ed. 2005. Olenekskii Ulus: Istoriia, kul'tura, fol'klor (Ulusy Respublitsy Sakha (Yakutia)). Yakutsk: Bychik.
Gurvich, I. 1977. Kul'tura Severnykh Yakutov-Olenokodov. Moskva: Nauka.
Gurvich, I. 1963. Current ethnic process taking place in Northern Yakutia. Arctic Anthropology 1:2.
Pika, A. 1999. Neotribalism in the Russian North: Indigenous Peoples and the legacy of Perestroika. Seattle: University of Washington Press.



トナカイ猟に備えて、息子に銃を教えるのは父の役目だ。2006年

季刊 124. 2008 春

国立民族学博物館
協力

民族学

〔目次〕

- 特集
003 **ロシア北方の民**
ソ連崩壊後の激動期を経て
- 004 **序論**——シベリア、極北、極東地域の今
佐々木 史郎
- 008 **エヴェンキ**——トナカイ飼育の崩壊と狩猟への転換
高倉 浩樹
- 014 **チュクチ**——ベーリング海峡のクジラ猟企業の再編
池谷 和信
- 020 **ネネツ**——経済自由化にともなうトナカイ牧畜とその変化
吉田 睦
- 025 **ウデヘ**——企業経営による狩猟と森林開発
佐々木 史郎
- 032 **カレリア**——村落における市場経済化経験
藤原 潤子
- 036 **ブリヤート**——宗教「復興」と青年組織
渡邊 日日
- 041 **極東の古儀式派教徒**
——信仰を守る熱意とその困難
伊賀上 菜穂
- 046 **サハ**——鳴り響くホムス
荏原 小百合
- 050 **トウバ**——喉歌フーメイをめぐる歴史
等々力 政彦
- 056 **総括**——周辺化された人びとのポスト・ポスト社会主義
佐々木 史郎
- 058 **朝メシ前の人類学**——フィールドでうまれる対話
第4回 これって高いんでしょうか？
文＝松田 凡 写真＝水井 久貴 イラスト＝中川 洋典
- 064 **再見細見世界情勢 9**
大統領辞任後のフジモリとペルーをめぐる情勢
村上 勇介
- 069 **海人万華鏡 第11回**
海唄とともに生きる
living from the sounds of the ocean
文＝あん・まくとなと 写真＝磯貝 浩
- 076 **朝食に暮らしあり 11**
華人の移動とマレーシア料理 市川 哲
- 078 **大インダス世界への旅**
最終回 河口へ 数々の文明の興亡と
現代パキスタン 船尾 修
- 102 **本で会いましょう23** 岸上 伸啓さん
急激な社会変化の波にのみこまれて
生きる道を模索するイヌイットの人びと
- 104 **書架はいざなう**
歴史と虚構の狭間のアレクサンドロス 山中 由里子
- 105 **国立民族学博物館**
ミュージアム・ショップ通信
- 表紙 チュクチの子どもたち
写真／文＝関野 吉晴
写真提供 阪本 秀昭、山添 三郎、ビョートル・オコネシニコフ、
毎日新聞社、読売新聞社
本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影によるものです。
写真説明はとくに記載のないかぎり、撮影者の記述です。

たばこと塩の博物館開館三〇周年記念特別展
おおむらつぐさと
大村次郷 ユーラシア写真図鑑

二〇〇八年五月一七日（土）から七月六日（日）まで
〈いっぶくの情景〉
嗜好文化探訪の旅



朝食時に茶（レンガ茶）をのむウイグル人 トルファン。撮影・大村次郷



たばこと塩の博物館

開館時間：10:00～18:00（入館は閉館の30分前まで）

休館日：月曜日

料金：大人・大学生 100円【50円】 小・中・高校生 50円【20円】

※【】内は20名以上の団体料金

※70歳以上の方は無料（証明書が必要）

郵便番号：150-0041 住所：東京都渋谷区神南 1-16-8 電話：03(3476)2041 FAX：03(3476)5692

ホームページアドレス：<http://www.jti.co.jp/Culture/museum/WelcomeJ.html>